

未来への伝承

映像「大畑のからかさ万灯」

博物館では3月から5月にかけて開館30周年記念「花火と土浦Ⅱ―祈る心・競う技」を開催しました。土浦を代表するふたつの花火である「土浦全国花火競技大会」と「大畑のからかさ万灯」に注目し、これらを通して花火の歴史的側面とそれを支えてきた先人たちの歩みを振り返りました。

博物館の情報ライブラリーコーナーでは、このふたつの花火に関する映像をご覧いただけます。花火競技大会に関する映像は、未来への伝承No.144にて取り上げましたので、今回は「大畑のからかさ万灯」についてご紹介します。

この映像では、からかさ万灯の特徴、近辺の伝統花火との比較、からかさ万灯を支えてきた人々、本体の組み立て、仕掛花火の作り方などを記録しています。

大畑はその名が示す通り、新治台地に広がる畑



▲「からかさ」を立ち上げる
(2016年8月15日)

作地であり、水不足に悩まされ続けてきた地区でした。「大畑のからかさ万灯」は雨乞いや五穀豊穡・家内安全を祈願するために江戸時代中期頃に始まったとされ、現在は8月15日に行なわれています。唐傘から降り注ぐ光の雨は、順調な降雨を期待する農家の祈りを表現したのもとも言われています。

からかさ万灯は、最上部の「八つ口」、唐傘の周囲に吊り下げる「手ボタン」、導火線の役割を果たす「道火」、綱を使い唐傘本体の導火線に点火する「綱火」の4種類の仕掛花火で構成されています。これらを複合的に組み合わせ一つの花火になるよう工夫された大掛かりなものですが、ひとたび点火するとわずか3分ほどで終わってしまいます。

しかし、いかに華麗に点火するか、勢いよく走る火をどのようにして静かに提灯へと導くか、大畑の人々が蓄積してきた知識と経験が、短い光の輝きの中に込められています。

巨大な唐傘から美しく降り注ぐ花火の仕掛けは、大畑の家を継ぐ男子により継承されてきました。現在火薬を扱う作業の多くは専門の花火師に委ねられていますが、今日でも道火や綱火といった一部の仕掛けは、地元の人々が継承してきた技により手作りされています。

茨城県指定無形民俗文化財でもある「大畑のからかさ万灯」は、記録保存などの措置を構すべき



▲点火したからかさ万灯
(2016年8月15日)

文化財として昭和57(1982)年に国の選択を受けました。

新治地区には「大畑のからかさ万灯」のほかに2件の茨城県指定無形民俗文化財があり、これらも映像にまとめられています。ひとつは山ノ荘の「日枝神社流鏝馬祭」で、中世の西日本の祭祀に起源をもつと考えられるヒトツモノが登場し、大猿退治の物語に彩られた流鏝馬が現在4月の第一日曜日に行われています。もうひとつは、「田宮ばやし」で、厄病除けの意味合いが強い大杉囃子・疱瘡囃子など、七つの曲目で構成され、その独特の音律が評価されているお囃子です。

地域の歴史と伝統に育まれた貴重な文化が継承されてきた証となる映像を、情報ライブラリーコーナーでぜひご覧ください。

国立博物館 ☎ 824・2928